

中学生時代の学業における親および教師の期待達成が 大学生の関係特定性過剰適応に与える影響

二 村 真太郎

本研究では、まず期待研究に関する動向を概説した。親の期待は、「親の期待と子どもの願望のずれ」、「親が知覚した子どもに対する期待」、「子どもが知覚した親の期待」、「親の期待に対する受け止め方」、「親の期待に対する反応様式」、「親の期待達成度」の6つの観点からまとめられ、3つの課題が指摘された。1つ目は、親と教師両者の期待に関するデータをとった研究が少ないこと、2つ目は、本邦において、親の期待と子どもの願望のずれ、および、親の期待達成度のように、個人と環境の適合の観点から検討されることが少ないこと、3つ目は、本邦において、期待から青年への長期的な影響について検討されていないことであった。本研究の目的は、3つの課題を乗り越えることであった。具体的には、父親・母親・教師の期待の3つを測定する、3者それぞれの期待と青年の学業パフォーマンスの軸にクラスタ分析を行う、中学生時代の父親・母親・教師の期待が、大学生の関係特定性過剰適応に与える影響を検討した。仮説は、(1) 大学生においても、親・友人・教師の3者それぞれに対する自己抑制および他者志向性が生じる、(2) 単純に期待達成度の高低ではなく、期待と学業パフォーマンスに関して多様なタイプが存在する、(3) 親や教師から高い期待を知覚し、それを満たそうと学業に励んだ者は、そうでない者に比べ、両親、友人、教師のすべての関係において過剰適応的になる、という3つであった。大学生を対象に、web上での質問紙調査が行われた。因子分析の結果、過剰適応に関して、「友人に対する自己抑制」、「教師に対する自己抑制」、「教師に対する他者志向性」、「教師に対する自己抑制」、「両親に対する自己抑制」、「両親に対する他者志向性」の6因子構造が採用され、1つ目の仮説は支持された。続いて、期待と学業パフォーマンスを軸にクラスタ分析を行った結果、「平均型」、「低期待・高学業パフォーマンス型」、「平均期待・低学業パフォーマンス型」、「低期待・低学業パフォーマンス型」、「高期待・高学業パフォーマンス型」、「高期待・高学業パフォーマンス型」、「高両親期待・平均学業パフォーマンス型」の7クラスターが採用された。単純な達成度の高低だけでなく、多様な群が見られたため、2つ目の仮説は支持された。最後に、各因子を独立変数、各クラスターを従属変数とした分散分析の結果、高期待・高学業パフォーマンス型は低期待・低学業パフォーマンス型や低期待・高学業パフォーマンス型より教師に対して他者志向的で、高期待・高学業パフォーマンス型は低期待・低学業パフォーマンス型より両親に対して他者志向的であることが示された。よって、3つ目の仮説は部分的に支持された。この結果を踏まえ、本研究の意義と今後の課題について議論された。